

わたしは

石坂洋次郎

講談社

ある日わたしは

昭和四二年一〇月八日 第一刷発行

著 者 石坂洋次郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京文京区音羽二―一二―二一

電話 東京 04 一一一一（大代表）

振替 東京三九三〇

印刷所 有限会社一弘社

製本所 有限会社大光堂

定価 三五〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

© 石坂洋次郎 昭和三二年

ある日わたしは

わたしはA洋裁学校の学生である。名前は城山ゆり子と云い、年は二十一歳。人が娘ざかりという年ごろである。

母が身体にいいからというので、小学校のころからバレエを習わせたし、中学校と高等学校では、バスケットボールの選手をしていたし、そのせいもあると思うのだが、わたしは身長が五尺四寸もあって、健康には自信がある。でも、母はそのことで少し心配もしているようだ。

「ゆり子。お前、もう伸びない方がいいよ。お母さんの娘時分には、五尺二寸もあると、大女と云われて、それだけで嫁入りの邪魔になったものだったが、いまだってお前ぐらしいの背丈けど、それにつり合う男の人の数はグッと少なくなりますからね……」

「いいわよ。わたし構わず伸びてやるわ。……誰ももらってくれなかったら、仁王さまのお嫁になるからいいの。……でもね、お母さん、女はみんな男の人に恋して、結婚しなけ

ればならないなんて、考えてみると煩わしい気がするところがあるの。男の人だって、同じことを感じてるかも知れないわ……。わたしたち、学校で、女だけ多勢集っていると、自分たちのセックスの匂いがムンムンと鼻についてきて、女ってどうも、あまり出来のいい生き物ではないんだなって気がするところがあるわ……」

「それあそういう気分の時もあるでしょう。でも、女が、女であることに謀反を起したってしょうがないでしょう。自分が女であること、そして人間であることを、すなおに肯定することが大切だわ……」

「それあ分ってるんだけど……」

ここでわたしの身分を紹介すると、わたしは北国のB県の産で、父はK市で弁護士をしている。人が好くて正直な父は、同業者の中では、中くらいの収入をあげているんだそう。母は父とちがって、物事をハッキリさせる、ジンの強い性格だが、しかし限度を弁えているので、出しゃばって目ざわりだというようなことはない。わたしはこの母に、いやになるほど似ていて、そのことが、ときに嬉しかったり、ときに憂鬱だったりする。

わたしの下には弟がおり、その下に妹がおり、二つずつ年齢がちがうが、二人ともはつきり父に似ている。だから、わたしは、わたしだけ母に似ていることで、かれらに対して、

わるいような気がすることもある。殊に、父に似て、顎が張った顔立をしている妹に対しては、気の毒に思ったりする。

母が鏡の前でお化粧をしている時など、わたしは周囲に人が居ないのを見すまして、後から、母の肩にそっとわたしの顔をのせ、頬と頬をすりつけるようにして、

「ねえ、どうしてわたしだけこんなにお母さんに似ているのかしら。義夫もまり子も、お父さんに似ているのに……」

「私に似ていていやなのかい？」と鏡の中の母は、ふと恐い顔をしてわたしを睨んだ。

「そんなこともないんだけど……。でも、お母さんの顔のいい所を、わたしが一人占めにしたようで、義夫やまり子にわるいような気がするのよ……」

「それは神さまのなさることで、誰のせいでもありませんよ。……お前は顔のことだけお云いだけど、私の性格のマイナスな面も、お前が一ぱんよけい受けついであるかも知れないんだよ。いまはまだそれが目立たないけど、年ごろになりしだい、お前の上に現われてくるのかも知れないからね……」

「なんなの、お母さんの性格の中のマイナスな面って……」

「さあ、人間、誰だってマイナスな面があるでしょう……」と、母はあいまいに微笑して、

「そうね、意気地なしってことも知れないわ……」

「お母さんが……意気地なし……。ちがうわよ」と、わたしは強く反撥した。

「将来、お前が、ああそうだったと思ひ当ることがなければいいがと思つてますよ……」
と、母は謎めいたことを云つて微笑した。

「わたしはね、ほんとはお母さんに似すぎて、いやだなあと思うこともあるの。なぜって、子供が一人前に成長しかけている一つの証拠は、親に対する漠然としたレジスタンス（抵抗）だと思うの、それが、わたしの顔ったら、お母さんそっくりで、お母さんから抜け出ているものが一つもないんだから……」

母は、指先きでわたしの頬をつまんで、やさしく、

「いまにお前だけの顔が出て来ますよ。お前の人生に対する考え方がハッキリし、誰か男の人を愛するようにでもなれば……。その時の顔はお前の責任で出来たものだからね……」

「わたしが……男の人を愛する？ いやだなあ……」と、わたしは鏡の中の顔を赤くしてつぶやいた。

わたしのために約束されたその男の人は、この広い世界の中の何処にいたのである

う。

たった一度だけ、母は、わたしが気にしていることについて、こう云ったことがある。

「……お前が私によく似ているっていうのは、お前をみごもった時、私の女としての命の火が、一ばん烈げしく燃えさかっていたからかも知れないよ……」

「それ、具体的にはどんなことなの、お母さん……」と、わたしは、何気ない調子で、母の表情のどんな微細な動きをも見逃すまい、と注意しながら尋ねた。

母の方でも、わたしに表情の動きを読みとられまいと努めてるようだったが、しかしわたしには、母の白い顔が少しずつ硬ばっていくのが、ハッキリと感じられた。

「なんにもありはしないよ。若い時って、人間はみんなそうしたものさ……」

「そう？ ……それでもいいわ。わたしは何時だって、お母さんの理解者だと思ってるんだけど……」

わたしはそれ以上、質問をつづけないことにした。母が云いたくないことを、無理にほじくり出さない方がいいと思ったからだ。ともかく、母の過去には何かあったのにちがいない。しかも、それは、父以外の男の人に関係したことなのだろう。なぜなら、父と母は遠縁の間柄で、平凡な見合結婚をしたのだし、顔立も性格も地味な方で、釣や万年青いじ

りに凝っている父に対して、母が、若い女の命の火を燃やすなどということは、とうてい考えられないことだったからだ。

でも、母に、父以外の男性ととにかく事件があったとしても、わたしは、多くの子供たちがそうした場合に感じるように、母が汚らわしいとか、父やわたしたちを裏切ったとか、そういう気持には少しもならなかった。母になにかの秘密があるにしても、それが分れば、わたしを烈げしく感動させるような事柄にちがいない、と信じきっていたのである。――それほどわたしは、身も心も、母にぴったりくっついた存在だったのである……。

さて、わたしが高校を出てから洋裁学校に入るようになったのは、特にわたしが志望したものである。わたしの高校では、わたし程度の成績の者は（わたしはクラスの順位で五番から下ったことはなかった）たいてい大学を希望したものが、わたしは、肩書よりも、自分の身に技術をつけた方がいいと思って、受持教師のすすめも断わって、洋裁学校に入ったのである。

あまりたしかな実感とは云えないが、将来のことを考えると、わたしは、夫婦が共に勤めに出かけるという生活様式はあまり好まないのだ。古いと言われるかも知れないが、ゆっくり家を守って、ゆっくり子供を生み、育てる、といった風な主婦の生活を送りたいと

思っているのだ。それには、洋裁とかデザイナーとか、女の身にぴったりついた技術をマスターしておくことが、なにかと都合だと考えたのである。

わたしはいま、杉並区のある未亡人の家の二階の四畳半を借りて自炊生活をしている。わたしの仕事が正直でゴマかしがないとかいうことで、家主の未亡人が、ときどき近所の家の子供服の仕事などをもって来てくれるので、そのアルバイトでも多少の収入があり、経済的にはだいふ恵まれており、自分の選んだ道にも自信をもつようになった。

しかし、お金のことを云えば、わたしはいつも一ぱい一ぱい使っていて、貯金など一文もない。映画、間食、音楽会、こまごました身のまわりの品などにお金を使うし、それにわたしの手許に余裕あるとみて、たかりに来る友人たちもあるので、わたし自身が、味噌汁と御飯だけで何日も過さなければならぬほど貧乏することもある。

たかりと云っても、男の友だちが食事にくるのが多く、わたしにしても「栄養失調」だとわめき立てる彼等に、食事の仕度を整えてやることは、半ば楽しみでもあるのだ。

まあまあ、そんな事で、東京でのわたしの学生生活は、強い刺戟はないが、平穩で、ある程度満ち足りたものであった。

ある午後、そうしたたかりの一人の矢吹健次郎が、わたしの下宿に遊びに来た。矢吹は、わたしと同じK市の高校で、わたしよりも一年上のクラスだった。そのころから、わたしたちは、かなり親しくつき合っていたのである。

いったい、わたしたちのK高校というのは、戦前は高等女学校だったもので、戦後それが高校になり、男女共学という建前から、男も入校するようになったのだが、女の十に対して男が一つというぐらいの比率だった。そして、はじめは男が珍しがられて大切にされていたようだが、いつの間にか多すぎる女学生たちの間の浮き上った存在になってしまい、みすみす女たちの熱気でスポイルされていくのが、わたしたちの日からもよく分った。

こんな女だらけの学校などに入って来なければいいのに——と、わたしは男の学生たちを気の毒に思ったものだ。

矢吹健次郎も、そうした哀れな男学生の一人なのだが、彼だけはある程度気骨があり、成績もよく、それに背が高くハンサムなので、女学生たちの間に人気があった。わたしたちは家同士が知り合いだった関係もあって、学校ではわりあい仲好くつき合っていた。休

み時間に、校庭の銀杏いもぎの木の下で、彼から数学や英語をよく教わり、仲間の女学生たちに羨やましがりたりしたものである。

ある時わたしは矢吹に尋ねた。

「わたし、貴方に学科を教えてもらったりして感謝してるんだけど、たった一つ気に食わないことがあるんだ。それ、云っていい？」

「いいよ。なんだい？」

「健ちゃん、なんだってこんな女ばかりの学校に入ってきたの。……女の子にもてようと思って……」

「よせやい。そうじゃないんだよ。これからの世の中は、民主主義で、どこも男女共学だというだろう。俺、それを真に受けて、ここの学校が家から近いし、景色もいいし、校舎も立派だから、ここに志願したんだよ。そしたら、女ばかりうじゃうじゃいるんで、俺、ガッカリしたんだ。……俺、女の子ってやさしいもンかと思ったら、多勢集ると、けっこう意地わるだったし、つるし上げをやったりするんで、驚いてるんだ……」

「当たり前じゃないの。女だって男と変りのない人間なんだから。……あなたがた、こんな学校にまちがって入って来たばかりに、みんな男らしい元気をすり減らしてしまってるわよ。」

……あたし、こんな高校を出た男の所には、決してお嫁にならないことにしようつと……」

「しょうがないよ。俺、なんにも知らなかったんだから……」

あのころは、世の中がどう変っていくのか、誰にも見当がつかなかったのだし、健ちゃんもウソをついてるわけではないだろう。高校を出ると、健ちゃんは、W大学の理工科に一ぺんでパスした。そして、わたしが一年おくれて上京するようになるまで、ときどき、感傷的な手紙をくれたりした。

いよいよわたしが上京すると、健ちゃんは待ち兼ねてたように、わたしの所へよく訪ねて来た。そして、都会生活に慣れないわたしを親切に指導してくれた。学資が十分でないので、アルバイトをしても、かなり追いつめられた生活をしているようであり、そういう健ちゃんに、ときどき栄養価のある食事をつくってやることは、わたしにとっても気分が慰さめられることだったのである。

いや、もっと卒直に云えば、健ちゃんは友人以上の好意を、わたしに対して、ひそかに抱いているらしいのだが、そういうことになる、わたしは、男として気が弱いところがある健ちゃんに対しては、もう一つ物足りないものを感じており、だから、健ちゃんのひそかな気持を募らせることがないように、気をつけてサバサバしたつき合い方をしていた

のである。一ぱんに、男と女の交際では、女の側にそうした心づかいが必要なのではなからうか。でないと、男は、相手を冷静に見きわめる余裕もなく、すぐ夢中になってしまう生理をもっているらしいから……。

その日は土曜日だった。小春日和とでもいうのか、温かくおだやかなお天気だった。健ちゃんは、ブラシがよくかかった学生服を着ていたが、ズボンにも折目がついていて、新しい派手な靴下をはいており、髪もきれいに撫でつけてあって、そうした改まった恰好に接すると、おやと見直したくなるほど立派だった。背が高く顔も面長な美少年なので、高校時代も「ジェームス・スチュアート」というあだ名だったけど……。

「どう、忙しい？」と、わたしは、彼の美男子ぶりを賞める代りに、そう言葉をかけた。

「うん、忙しいよ。こないだから、家庭教師の口を二軒ほど受けもってるんだ……」

「そう。それだったら、経済が楽になるでしょう。今度御馳走してもらうわね……」

「楽にならないよ。うちの方がどうも駄目らしいんだ……」と、健ちゃんは元氣のない調子で云った。

健ちゃんの家は、街の目抜き通りに雑貨商を営んでいるのだが、どうやら商売が思わしくいってないらしい様子だった。

「だめよ、考えこんだりしちゃあ……。わたしも、ときどき栄養食ぐらいは受けもって上げるから、元気でがんばってよ、ね……」

「うん。……君のそこを訪ねる時ぐらいのものだよ、僕がのんびりして、元氣になれるのは——」

「そう？ ……わたしって、脳味噌が少し足りないけど、陽気な方だから、ハハハ……」と、わたしはとってつけたように笑い出した。

二人ぎりでしんみりした気分をつくることは禁物なのである。

「押入れの中に、国から送って来たゴールデン・デリシヤスが入ってるからお上んなさいよ。それを齧りながら、窓の外を見ていてちょうだい。わたし、着更えをしますから……」

健ちゃんは云われた通り、林檎を齧りながら、窓の外の青空を眺めていた。高校時代には、わたしの方が、健ちゃんを先輩だと思っていたのに、いまでは健ちゃんの方がわたしの後輩のような気がしている。女の年齢って可笑しいものだ。だが、男のその幼さが、男がグングン伸びていける秘密なのかも知れないんだけど……。

そんなことを考えながら、わたしは、グレイのチェックのスカートに、白のブラウス、黄のカーデガンをつけた。わたしは、さっぱりした色のとり合せの服装が好きなのだ。